慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田無三五郎が導き出すもの：前田河廣一郎「川」論
Sub Title	
Author	村山, 龍(Murayama, Ryu)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2012
Jtitle	三田國文 No.55 (2012. 6) ,p.1- 16
JaLC DOI	10.14991/002.20120600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20120600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田無三五郎が導き出すもの

――前田河廣一郎「川」論――

村山　龍

一、はじめに

人は他者との関わりの中で他者を鏡として利用し、そこから見える差異を基に自己を見出していく。たとえば、現状に対して不満を持たない人も、自分の持っていないものを持つ人を見ることで、持たない自分をあらためて意識し、それを獲得するために活動を開始する。さらにその欲望を果たそうと活動する人間を見て、自らも同じ欲望を抱くという場合も少なくない。ルネ・ジラールによって他者の欲望を欲望するという意識[1]が人の活動の根本にあると言われて久しい。

欲望がこのようにして人間を動かしていくことは、より良き自分という理想に向けて順次自己をアップデートしていこうとする人間の本性とつながるものであり、進化論的な認識の一部として我々の中に存在している。また一方で、それとは反対の認識のありようもある。自分よりも恵まれない状態にある他者を見ることで、今現在の自分の状態を知り、それを守ろうとする認識である。これは自己保存の法則に則った防衛意識の表れであり、前者とともに人間の本性の両輪を成すものである。人の欲望の根幹にはこの双方の認識があると考えられる。

本稿は、人間の欲望の根幹にあるこの双方の認識を踏まえつつ、前田河廣一郎「川」という小説の中で描かれる田無三五郎という労働者の存在について読み解いていこうとするものである。前田河は徳冨蘆花の弟子として登場し、明治四十年から大正九年まで十三年間の渡米を経てプロレタリア文学運動の闘将として菊池寛らと舌戦を交わした作家である。プロレタリア文学運動の先に目指された社会改革運動、ひいては社会改革そのものへと至らんとする営為は、個人の欲望であったものが連鎖的に他者に共有されることで集団的欲望となり、最終的には社会全体に共有されることである。この連鎖する欲望の経路は、テクストの中で描かれるストライキへと至る道として示される。さらに一連の欲望を抱くこと自体を可能とするには科学的思考が求められる。自らの置かれた状況を理解してそれを不利益を被っている点を洗い出す分析能力と、状態を改善するための行為を選択していく合理的判断能力とが必要とされ、それらを社会的普遍性にまで高めようとする必要があるからである。

またマルキシズムをはじめとする科学とは「仮設」であり、

マルキシズム文学とはその「仮設に従はざる限り、その存在力を失墜する」「仮設文学」であると横光利一が指摘したように、[2] 前田河らのプロレタリア文学は科学的思考によって導かれる唯物弁証法に根ざした抽象的な議論に依拠することを前提とするものでもある。しかし小説としてテクストに描き出されるものは、それぞれ具体性を持った人間であり、彼らのつながりは決して抽象的なものではない。こうした運動理論の抽象性と小説テクストの描く人間の具体性のはざまで生じる問題について考察を進めていきたい。

二、プロレタリア文学としての「川」

まず「川」の梗概を記しておく。主人公の田無三五郎という砂利取りに従事する労働者が大怪我をして働けなくなったことが原因となって仲間の労働者たちに自分たちの待遇改善を要求する気運が高まり、そのままストライキに突入、最後にスト破りのためのスキャップが現われるが彼らに三五郎が何事か（これは作中で明かされない）を語りかけてスト破りは回避され、その後には三五郎の遺体と旗が残っていた、といったプロレタリア小説である。

この「川」は前田河の作品の中でも評価の高いものではない。前田河の作品として名高いものは「三等船客」（『中外』大10・8）や「セムガ」（『改造』昭4・11）であり、「川」が注目されることはなかった。「川」に対する論究は同時代評として数えられる四つのみであり、しかもその中でも芳しい評価を得られていない。それらの具体的な批判の矛先は「川」の冒頭の表現に向かっている。「田無三五郎は、二本の手と、二本の足とを持つてゐた。」という一文に始まる主人公・田無三五郎の状態を表した表現について、松井雷多は「苦心」した表現であり、その表現自体が「滑稽」さを表しているとはいえ「正しき意識への目ざめ」が書かれないばかりに「変な言葉」でしかないと言い、[3] 杉山平助は「これはウイツトでも何でもな」くて、「単なる冗舌にすぎない」[4] 表現で「ムカ〳〵と吐気のやうなもの」を感じると酷評している。

彼らが酷評したこの表現は、松井の指摘する「機械化された人間が如何にして意識を持つたか」を表すという作品の目的を達成するために、「意識」を持つ前の田無三五郎が階級意識に無自覚で会社に命じられるままに働くだけの人間であったことを示すものとして確かに読める。労働者の権利に対して何の問題意識も持たずにいる状態を、意志を持たない機械になぞらえて表現しているのである。

ただ機械と連関させて語る表現は田無三五郎にだけ用いられたわけではない。三五郎らを監督する菱刈文吉についても次のように語られる。

> 監督の菱刈文吉、この男ほど―この機械（砂利採取船―論者注）によく似た人間はあるまい。すること為すことのピンからキリまでが、恐ろしく疳高なのだ。赤錆がして口が大きく、やたらにバツトの煙を吐いて、絶えず動き廻はつてゐるづんぐりした格好は、間違つて砂利採取船が人間になつたのではないかと思はれる。

菱刈は会社の意向に沿って監督をしているので労働者たちと敵

対する者ではあるが、三五郎と同様にトロから放り出された甘利老人が

『あの時さ、菱刈めが時計を出しやがつて、七時までの貨車の積込みに間に合はねえと困るつて、あいつの歩合に関係するんでの、やけにトロを急がせやがつたのが悪りいんだよ。—おら、どうしても、三五郎どんがこんなことになつたなア、会社の手落だとか思へねえだよ。どうだか、皆の衆？—』

と発言していることから、菱刈にも会社に課せられたノルマがあるとわかる。つまり菱刈もまた労働者であるのだ。このことから労働者が他の労働者を圧迫している状況が開陳され、その結果として貧困の押し付け合いが労働者の中だけで行われていることが指摘できる。「機械によく似た人間」である菱刈がやはり機械的な三五郎ら労働者とともに機能することによって磧での砂利取りという大きな〈機械〉が動いているのである。

このように機械らしさということが強調された人物たちが集まっているテクストの中で労働者たちが人間らしく生きることから疎外された状態を回復するために〈運動〉が組織されていくという構成を見る限り、資本主義経済による抑圧と対抗措置としての〈運動〉を描くプロレタリア文学としての枠組みの中にある小説であることは自明である。さらにその構造をつくり出すことになった、機械と人間を重ねていく前田河の表現意識は「滑稽」で「変な言葉」という印象をもたれる要因となったことから当時としては奇抜なものであったような印象を受けるが、実は機械と人間の問題は当時のプロレタリア文学作家の問題意識としてそう突拍子もないものではない。

評論「新芸術形式の探求へ —プロレタリア芸術当面の問題について—」（『改造』昭4・12）[5]で蔵原惟人はプロレタリア芸術における機械の重要性を語っている。まず、「高度に発達した近代資本主義社会が発見して、我々に残した美」として「大都会と機械の美」を指摘し、「久しい間機械は現実の「卑俗」と「粗暴」の権化であり、芸術は機械と正反対なものとして、この二つのものの結合は夢にも考えられなかった」という。しかしプロレタリア芸術にとって「機械は決して未来派の言うごとくそれ自身が目的ではなくて、何等か人間の目的に奉仕するものであり、したがってその運動も盲目的、猪突的なものでなくて、合目的的な、正確な、力学的なものとして現われ」、「ただこの社会の物質的方面における、最も新しい、最も重要な要素として」表現される、というものである。この蔵原の言は、同じく昭和四年に板垣鷹穂が『機械と芸術との交流』（岩波書店）を出版し、プロレタリア文学陣営からも新居格「機械と文学の関渉」[6]、石浜知行「機械と芸術」[7]などが立て続けに発表された時代において、工業化され機械が積極的に取り入れられた社会の中で、芸術がこの機械をどう取り扱うかという共通した問題意識のもとに発せられたものだった。

また世界的にはフリッツ・ラングの『メトロポリス』が上映[8]され、チャペックの『R・U・R』[9]が発表されていたことを鑑みれば、人造人間（機械化された人間）的な表象は既に一九三〇年前後の同時代の中で一般性を勝ち得ていた[10]と考えられる。その解釈のコードが機械の美をフェティッシュとして賛美する

モダニズム的路線であったり、資本主義経済下の社会の縮図として批判的に見るプロレタリア文学的路線であった。

こうした状況の中で、前田河が機械について抱いていた考えを「十一月の断想」(『文芸戦線』昭5・11)[11]の中に見ることが出来る。ここで前田河は「この動力時代の現在、美的表現の対象となるべき客体にも異常な変化が起つてゐることを知らねばならない」と言い、機械の重要性へと論を進める。

一部のブルジョア作家の間では、すでに野心的に機械を取入れてゐる人があるやうにも見受けられるが、(中略)端的にブルジョア生活の外飾としての道具立てとしてしか扱はれてゐないのである。(中略)又、近頃急に世の中を新しく発見したやうに騒ぎまはつてゐる新興芸術といふブルジョア芸術の貰ひ子の取入れてゐる機械も、単なる模型的ホツチ・ポツチであつて、彼等の関心が生活と機械との有機的結びつきでないことは、そのどの作物を取つて来てもはつきり過ぎるほどはつきりしてゐる。

と主張して、板垣鷹穂ら非・プロレタリア文学勢による文学への機械の取り入れを批判した上で、プロレタリア文学は「『穀物の一ブツシエル毎に、石炭の一ハンドシツドウエイト毎に、その他凡ゆる必需品が、生産者自身だけでなく、また其の近くの人達だけでなく、遠方の人までも』利益するための生産や交通運輸や諸建設のための機械」や「現在、プロレタリアの日常生活に入り組んでゐる機械力の生産品の密接な関係、労働者の従事する近代的諸産業に充満した機械の力の勢力」を描かなくてはならないと力強く語っているのである。

これら同時代の機械言説と前田河自身の機械観をふまえて、テクストを再度確認してみよう。三五郎の身体は「二本の手と、二本の足」とそれを「有機的に動かして行くための補助機関」の集合体だと言われているが、これは三五郎の身体を労働を軸にして再構築した認識である。この身体を持った三五郎の労働生活は以下のように叙述される。

これだけの、二本の手と、二本の足の操作を営むには、さほど複雑な、からだのほかの部分の補助的活動なんかの要らないことは、去脳動物についての実験心理学の例をひくまでもなく、誰にもわかりきつたことである。よし、それが、十年間つづいたとしても、それには惰性といはれる物理力もあつて、簡単なものを、より一層と簡単にするのでもある。

作業をするための手足にのみ重点が置かれ、その手足の持ち主であるはずの人間の理性(意志)について全く顧みられることのないこの人間観は「去脳動物」としての労働者を表している。このように人間を機能的に解釈する方法が求めるのは、個々の人間の具体性を捨象し、大きなマニュファクチュアの中で相互に交換可能な部品としての人間である。さらにこうした三五郎の「ごく単純な労働」は「川の中の機械船が吹き鳴らす汽笛」によって管理されている。このことが指し示すのは、三五郎ら労働者が「一定の時間を告知する時計といふ物品」を持たないために主体的な時間の運用が出来ず、自らの時間を会社の「汽笛」に任せるしかないために起こった被支配の体制である。

会社という大きな〈機械〉は資本主義経済という欲望を達成する手段として用いられる道具であり、人間はその会社に管理される道具の一部へと貶められるのである。この機械性の拡大は、既に機械が人とその社会を取り込み、全体的な枠組みそのものとなっていることを示している。

以上のように、三五郎と労働現場の川という状況を描き出し、労働者をとりまく「機械の力の勢力」に言及している点で、「川」のプロレタリア文学としての構造は達成されていると言えよう。またテクストのプロレタリア文学性は三五郎が旗とともに現われる最終場面からも読み取ることが出来る。この点についても詳述しておこう。

テクストにおいて描かれる〈運動〉について松井は「一つの自然発生的な争議といふやうなものを語られたに過ぎ」ず、「如何なる一般的情勢の下にこの争議が発生したのかさへはつきりしてゐない」と批判しているが、青野季吉の「自然生長と目的意識」(『文芸戦線』大15・9)が提唱したプロレタリア文学運動の作品に持たせるべき「目的意識」がこの小説には欠けているというのが、松井の批判するポイントであろう。青野はプロレタリア階級が「自然に生長すると共に、表現欲も自然に生長」して出てくる「具体的の顕れの一つがプロレタリヤ文学」の作品であるという「自然生長」の姿を語り、それを〈運動〉として整備していくための「目的意識」の重要性を謳う。それは

プロレタリヤの生活を描き、プロレタリヤが表現を求めることは、それだけでは個人的な満足であつて、プロレタリヤ階級の闘争目的を自覚した、完全に階級的な行為ではない。プロレタリヤ階級の闘争目的を自覚して始めて、それは階級のための芸術となる。即ち階級的意識によつて導かれて始めて、それは階級のための芸術となるのである。そしてこゝに始めて、プロレタリヤ文学運動が起るのであり、起つたのである。

と解説しているように、「階級のための芸術」を導かんとする意識である。

この青野の「自然生長と目的意識」という観念に即して「川」を読んでみると、確かに小説の中に描かれる〈運動〉は田無三五郎の怪我という偶発的事故をきっかけにして起こったものであり、〈運動〉の当初から「階級的意識」を持って「闘争」に臨んでいたわけではない。このことは田無三五郎を見舞いに来た金と佐々木が「秋もうそ寒くなつ」た頃にようやくストライキという方法に訴えようと話がまとまったと三五郎に報告に来ることからも明らかである。最初は三五郎の「治療代」か「見舞金」を求めているだけの「談判」であったのが、「会社の人事係」河村と「談判」しているうちに、「日に十四時間もこき使は」れているにもかかわらず「日給一円」で仕事帰りに「トロ」にも載せてもらえないことへの怒り、すなわち労働とその対価の不均衡についての怒りへと昇華されていくのであるが、ここで青野の言う「プロレタリヤ文学運動」の一翼を担う作品となるには「目的意識」が足りないということになってしまうのである。〈運動〉の主体となった田無三五郎の仕事仲間たちはあくまで自分たちの労働について保証を求めているだ

けであり、そこには「階級的意識」はなく、「個人的な満足」への追求しかないからだ。このままでは読者を感化する優れたプロレタリア文学とはなりえないのである。

このような「個人的」意識のもとで彼らのストライキは決行されることになるのだが、そうした単純なものが成功するはずはない。ゆえに菱刈の「てめえら、一人残らず馘首だ！――この薄野呂ども、俺にてめえらの悪企みがわかってゐねえと思ってやがるか！　あれを見ろ――砂利採り人夫なんざあ、ここの砂利よりもふんだんにあるんだ！」という「磧一杯」の喚きを受けて登場する「町の方からぞろぞろと流れて来る、黒い人間の列」によって容易に打ち砕かれそうになるのである。だが、最終的にはその「黒い人間の列」とは「揉み合」いにもならず、ストライキの危機は回避される。田無三五郎によって「二尺五寸四方の赤旗」が振られたためである。

この「二尺五寸四方の赤旗」が象徴するものは当然社会主義運動そのものである。旗という象徴と社会主義運動の関わりを考える上で、昭和四年に書かれた徳永直『太陽のない街』の最終場面が思い起こされる。

―団旗は俺達のものだ！

青年達は、団旗に飛び掛かった。休戦派の者達が怒って奪ひ返そうとした。団旗は揉まれて、穂先の鞘が撥ぢけ飛んだ。

―横団旗を奪へッ。

先刻の阿弥陀帽の青年が、壇上から旗を蒐けて飛び降りると、素早く相手を突き飛ばして、団旗を持ったまま、脱兎のやうに、場外に走り出した。

―退場しろ！

青年達につづいて、婦人達も場外へ出てしまった。阿弥陀帽の青年は、団旗を両手に緊乎と抱きながら叫んだ。

―旗を護れ

―旗を！[12]

この場面はこれまで維持されてきた〈運動〉の象徴として旗が昇華されていく場面である。〈運動〉のすべてを団旗へと帰結させ、団旗という象徴を護ることが〈運動〉の護持に繋がるとしていくこの場面は、社会主義運動が労働者の権利を保障するという目的を達成するための手段として機能していたものが反転し、〈運動〉そのものを目的とする状況への転化を認められるのである。当時の『太陽のない街』に限らず、赤い旗に社会主義運動の象徴としての姿を透かし見る視線は当然の理解と言えよう。この旗を振った後に田無三五郎は「死んでゐた」のだ。つまり社会主義運動を示す赤い旗と交換的に、田無三五郎の命がこの場面で消費されているのである。

〈運動〉がスキャップの登場によって行き詰まりを見せようとしたとき、田無三五郎が「二尺五寸四方の赤旗」を持ってくることによって、これを守った。これは彼の「治療代」に端を発した自然発生的〈運動〉が、社会主義運動という明らかに「階級的意識」と連関を持った「二尺五寸四方の赤旗」によって権威付けがなされたということになる。そして「町から来た連中」が「不思議にも」「ぞろぞろともと来た方へ引き返へした」のは、仲間同士の身内意識に基づいた〈運動〉では破られ

たであろうストライキが彼等にも通用する普遍的な「階級的意識」に基づいたものに裏打ちされたから、と読むことが可能になる。ゆえにこの最後に田無三五郎がやってきて赤旗を振って死ぬという結末は、唐突の感もあり決して上手い結末と評価されなかったが、「目的意識」を意識して書かれたものであったと考えられるのである。

このように〈運動〉と資本主義経済の対立や労働者を取り巻く状況の機械性、そしてテクスト外部で〈運動〉を称揚するための目的意識を十分に内包したテクストとして「川」は読むことができる。つまり、「川」はプロレタリア文学の枠組みの中で構築されたテクストであり、これまでの評価もまたその枠組みの中で行われてきたのである。

三、語り手の意識した「実験心理学」

「川」というテクストがプロレタリア文学の枠組みの中にあることはわかった。そして、そのような枠組みを成立させる存在こそが語り手である。テクストの中で語り手は三五郎ら労働者たちの様々な活動をパースペクティブをもった視座から見下ろしている。三五郎が労働者としての意識に目覚めないことを「奇妙なこと」と言い、息子の二六と三五郎がよく似ていることを「アミーバの分裂とさほどちがはない一個の人間の二分の一づつ」だと言うような語り手は、自らが三五郎らの労働を見て意味づけようとする存在であることを隠さない。そして冒頭の章を次のように締めくくる。

かういふ田無三五郎が、ある日、偶然な機会からぜひとものを考へなければ、二本の手と二本の足との補助的活動がうまく行かない場合にさしかかつたのである。それは、例へてみると、川の中の魚が、陸へ上がつて一躍して馬にならうとした絶大な努力を、労働者田無三五郎が、きわめて短時間のうちに行はねばやらなかつたと同じことであつて、その経過には、かなり大きな物語がなければならぬ筈である。

ここで語り手は、三五郎が「ものを考へ」ざるをえなくなることで「かなり大きな物語」が展開される、というこのテクストの全体像を先んじて提示する。テクスト冒頭の一章分を割いて述べられるこの田無三五郎の現状と今後の展望とも言うべき語り手の意味づけがある意味とは一体何であろうか。

やはりテクスト冒頭の章において、語り手は三五郎の頭脳が「数種の反射群をどう連合するかについて怠慢」だと指摘したり、毎日同じ労働を繰り返すだけの「単純な行動の無数の反復が、労働者田無三五郎の、きわめて平穏無事な一生涯であ」ることから「去脳動物についての実験心理学」や「惰性といはれる物理力」に言及したりして田無三五郎を表象しようとしている。つまり、語り手は田無三五郎という存在を一つの現象として解析し読み解こうとしているのである。その際に語り手の注目は三五郎の脳と身体との接続の在り方に向いている。三五郎が「朝、川の中の機械船が吹き鳴らす汽笛によつて起き上がり一日の「単純な行動」をするという一連の行動を脳と身体との接続という観点から捉え直せば、「機械船」の「汽笛」という外部からの刺激が三五郎の脳に作用して砂利取りの仕事とい

う「単純な行動」が「反射」として身体を用いて行われるということだ。ここで語り手の言及する「実験心理学」が重要となる。「実験心理学」自体は十九世紀にヴントが発展させたものだが、アメリカで広く受容された心理学の形態でもある。その「実験心理学」の中でも、精神という不確かなものを観察する内観を廃して生理学に基づいた科学的な客観的実験を重視しようとするアメリカのJ・ワトソンが一九一二年に提唱した行動主義に着目したい。

ワトソンの考察[13]はソヴィエトのイヴァン・パブロフの心理学に影響を受けたものでS－R（Stimulus-Response）心理学とも呼ばれるが、動物の知的行動が学習によって成立しているとし、刺激と反応の関係を繰り返す中で人や動物の行動が形作られているというものである。さらにワトソンはいくつもの「反射弓」が長く複雑な中枢ニューロンを経て脳で「統合」されて「たくさんの部分が協同運動」する、それこそが人間の複雑な行動の実態であるとするのである。このように様々な刺激とそれを感受する受容器の組み合わせに対応して、様々な行動が生み出されるという極めて経験主義的で物質的かつ機械的な人間心理を主張したのである。

こうしたワトソンの主張と「数種の反射群」を「連合する」べき脳という観点を重ね合わせたとき、そこには非常に重要な示唆が現われる。それは、磧の労働という大きな刺激と、それによって引き起こされている労働に関する様々な問題という「数種の反射群」を「連合」させることができれば「怠慢」であった三五郎が「第二の田無三五郎であるとか、十人目の田無三五郎」について考えるようになる、ということだ。すなわち労働の中から〈運動〉を呼び起こす定式を「実験心理学」的に導こうとしているのである。ゆえにこのテクストの語り手の認識は非常に科学的な分析力を用いたものであり、テクスト全体を田無三五郎という労働者に与えた刺激とその反応、それと田無三五郎の怪我という刺激と磧の労働者たちの示した反応という二つの科学実験として描き出そうとしていると言えるのである。後者の実験に関しては〈運動〉の自然生長的発生という結果を導き出すため、前節で指摘したように、プロレタリア文学の枠組みの中でわかりやすく消費され検討がなされていた。しかし、本来このテクストの特異性となるべき前者の実験への検討は未だなされずにいるのである。この科学実験の様相を見ていくことで、これまでの枠組みとは異なる読みが可能となるのではなかろうか。続けて、彼への刺激と反応からテクストにどのようなものが表わされているのかを見ていきたい。

四、三五郎の個別性

田無三五郎という存在に対して大きな影響力を持った刺激は何よりもまず磧での労働である。そこで、磧での労働を刺激とした三五郎がどのような反応を示したのかを見ていこう。すると、その際に田無三五郎の他者認識と語り手の求める他者認識との食い違いをめぐる問題が浮上してくるのである。

田無三五郎が労働者としての自己の現状をどのように捉えていたかをまずは確認しておく。田無三五郎は一日に十三時間半（「四時から、正午まで」と昼休みをはさんで「十二時半から

午後六時まで」）川縁で砂利を集める仕事に従事している。そして、その忙しさから「四肢をつないで、有機的に動かして行くための」「補助機関の一つである頭脳」に「独立した活動を営む」ことを許されないでいるという。ここで言う「独立した活動」とは、「複雑な世の中」によって規定された「労働者」という人種（ここに田無三五郎も含まれる）の中に「第二の田無三五郎であるとか、十人目の田無三五郎であ」るとかを見出し、彼らと連結していこうとする意識の流れのことを指しているのだが、田無三五郎はこうした頭脳の「独立した活動」に無頓着であったとされ、それは「彼れの頭脳」が「数種の反射群をどう聯合するかについて怠慢であつた証拠」として挙げられているのである。

この「怠慢」であった頃に、三五郎は「第二の田無三五郎や、十人目の自分を『二本杉の作』とか、『土手の甚太』などといふ名前で、はつきりと自己から区別しようと試みた」とされている。ここからは三五郎にとっての自己と他者が決して同一ではなく、独立した存在として認識されていたことがわかる。そして、こうした他者認識は、三五郎らに対して会社が求める労働者の理想像が右に示したような考えずにただ働く機械的人間という個別性のないものであることに対する一つの抵抗として読むことができる。労働者一人一人は決して第n番目の田無三五郎と呼称できる集団的な群体の一部ではなく、それぞれ特記されるべき特徴を備えた個人なのである。田無三五郎の心配をして集まった六人の人物も、隣家の老人・甘利をはじめとして、「いつも割の悪りい方へ廻はされる朝鮮人の金」、「小魚さへもゐないのは、会社が川で砂利を取るからだと云」う二本杉の作兵衛、「一昨年の洪水で死んだ、手振ひで砂利を採取してゐた馬入りの吉のことを嘆」く土手の甚太郎、「砂利の相場と売捌き先のことを、見て来たやうに話し出」す「井戸をへだてたま向ひ」に住む佐々木、太田兵造県会議員の先代が土方で「わしらと一緒になつて、川の砂利を掬つちゃ売つ」ていたことを暴露する「川向ふの自作農であつた」老人・谷井熊次というように単なる労働者として十把一絡げにされるのではなく、一人一人に個性が付与されている。三五郎のために集まった人々はこの段階で個別性を持ちえていたと言えよう。会社の要求する労働が三五郎らを非個性的な方向へと追い込む中、そこから抜け出す手段としての個別性を認める認識を三五郎は手にしていたのである。

他方、人間性を回復するべき〈運動〉を生起させようとする語り手の求める他者認識はどのようなものであったか。〈運動〉が立ち上がる瞬間には「複数の反射群」が「連合」して発生する「めいめいの知識」が集約される必要があるように、個々の労働者の個別の知識とそれを「連合」しようとする主体的意志が求められる。しかしその〈運動〉が立ち上がり知識が共有され、一つの価値観にまとまってからは各々の個別的主体が生きることはない。彼らに求められるのは〈運動〉を構成する価値観のよき理解者であり、よき実践者であることだけであるのだ。そして同じ価値観を共有するもの同士で「仕事場や、めし屋や、往来のどこにも」いる「二本の手と二本の足だけの人間」を「第二の田無三五郎であるとか、十人目の田無三五郎で

あつた」と認識し、彼らと連帯していくことによって〈運動〉は達成される。そのため、この連帯の中に三五郎が試みたような名付けによる画一的認識からの脱却という抵抗の形式は含まれない。〈運動〉のための認識に立ったとき『二本杉の作』や『土手の甚太』、そして田無三五郎といった個人の特性は何の意味も持たないのである。なぜならば、〈運動〉の紐帯となるのは資本家によって虐げられている「第二の田無三五郎」であるとか、十人目の田無三五郎」であるように、個々人の具体性ではなく、労働者という階級性だけになってしまっているからである。ここに田無三五郎と語り手の相違がある。

作者である前田河はE・T・ヒラー『ストライキ』[14]を翻訳しているが[15]、その中に次のような一節がある。

ストライキの底を流れる動機も、大部分その集団性にある。この動機を仮に実用性と社会性との二つにわけて見やう。実用性の要求は、労働契約の条件の改善が目的である。ところが、その実用性がそれだけでぽつんとあるものではなくて、社会性によつて、置き替えられるときに、それは直ちに集団性を帯びる。社会性のおもなるものは、己が階級に属する人達と共に、また、その為に行動し、集団的に激発された感情をドラマテツクに表現しやうとする人間の本当の気持である。これを細くわけると(1)争議の団結によつておこつた同志愛、(2)集団といつしよに行動することによつて生ずる勇気、(3)勝つといふ気持から出る自負心の増加、などである。

ストライキの社会性を「己が階級に属する人達と共に、また、その為に行動」したときに生ずるものだとするのだが、注目すべきはストライキという行為によって生じる没個性化を図らずも表している点にある。ただ労働者が連帯して「労働契約の改善」を求めることを目的とするのではなく、仲間と共にあることそれ自体の喜びを「人間の本当の気持」として称揚しているのだ。やはりここでも〈運動〉における労働者が階級性だけで認識されていると言えるのである。

追い詰められた労働者がそれぞれ主体化していくことによって〈運動〉を成立させるだけのバックボーンを構築できたのだが、そうして成り立った〈運動〉の担い手は〈われわれ〉という主体であった。小さな〈私〉の集合体としての大きな〈われわれ〉が動くことで成し遂げられる成果は確かに大きい。個人では対抗しきれない大きな組織に対抗するためには当然の戦略であるのは、ヒラーがストライキの「集団性」を重視していることからも明らかである。しかし「同志愛は、他人を自分と同じに愛し、互いに苦痛を忍び合ひ、集団的闘争の目的に向つて進み、その為に飽くまで忠実であるといふやうな、人間の最も美しい道徳性を知らず知らずの間に発達させ」たものとしてしまうように、集団であること自体が自己目的化されることは避けなくてはならない。集団（階級）への帰属意識が高まりすぎることは、結果として集団による個人への抑圧を再び生み出すからである。テクスト中の三五郎を除く労働者たちの〈運動〉はまだまだ〈運動〉としての端緒についたばかりであるが、最終的に「二尺五寸四方の赤旗」という象徴へとテクストの結末を集約させた語り手の示唆する階級性への強い意識は個々人の

主体の喪失を予感させてしまうものだろう。

このようにして三五郎の他者認識と語り手の示す労働者のあるべき他者認識を比較していくことによって、〈運動〉と資本主義経済が共に労働者の個別性よりも集団性に重きを置いているという特徴が顔をのぞかせる。さらにこの類似性は他の観点からも見つけることが出来る。それは〈運動〉と会社での労働、それぞれを動かす主体を比較することによって見えてくるのである。次いで〈運動〉という刺激が三五郎にもたらした反応を見て、その意味を問いたい。

五、誰のための〈運動〉か

自らの置かれた状況とそれと同様の状況に置かれている他者への関心のなさという「怠慢」は、田無三五郎自身が「トロから投り出され」てあばら骨が一本折れるという切迫した状況になって初めて彼に自覚される。すなわち、働くことのできる体＝健全な身体が欠損したことによって、「第二の田無三五郎であるとか、十人目の田無三五郎であ」る労働者たちとの連結が起こってくるのである。これは田無三五郎以外の労働者たちにも同じく言えることで、田無三五郎が身体を欠損して働けなくなるという状況になって初めて彼らの「怠慢」は解消される。連結していく労働者たちの様子はテクスト中で二度にわたって叙述される。

① めいめいのかういふ知識は、日頃は匿くされてゐて、てんでの頭脳の隅つこの方に、黴のやうにか細く生きてゐるのだが、ひとつづつ集まると、急に記憶でも、噂でもなくなつて、全く別な力になつてしまふのであつた。誰よりも、妙なこの場の興奮から、それを云ひ出した当人達が、見る見る自分達の話から、今まで考へたこともない砂利についての恐ろしい歴史が展開されたことに驚いてゐた。

② かういふことは、今までの磧では、誰も考へつくものではなかつた。三五郎が床についてから、みんなで一人づつの意見を出し合つて、はじめて、一人で考へてゐることが他人の考へと一緒になつて、やつとそこに何かの力が出るのだといふことを知つたのであつた。―ストライキ！

このようにして起こった各々の労働者が持つ知識の連結が「全く別な力」、すなわち未組織状態から脱却したプロレタリアの力（これがストライキの力）を呼び起こすという意味を示していることは明らかである。そして先述したように、この未組織状態からの脱却の呼びかけを作品の目的として読み解くと「川」という作品はプロレタリア文学の千篇一律性という陥穽におちいってしまう。それは、小林多喜二の「一九二八年三月十五日」を取上げて「身体を権力の装置によって直接侵される、それを描くことによって自由の侵害と抑圧を表現するというのは、何も多喜二に限ったことではなく、プロレタリア文学の表現の中にもしばしば見られる発想である」[16]と島村輝が言うように、田無三五郎の事故とそれに由来する〈運動〉の起こりというテクストの構造からも読み取れる千篇一律性であるのだ。

しかし「川」というテクストの特性はまことにプロレタリア文学的な構造を持ちながらも、その構造自体を批判する読みを

可能とする点にある。このテクストは〈運動〉の起こりを見届けて終わるだけではない。そのきっかけとなった田無三五郎がこの〈運動〉にどのように関わったかを見ることによって、それは明らかになるのである。

田無三五郎の事故をきっかけとして労働者たちは会社と「談判」することになるのだが、注目すべきはこの「談判」に事故の当事者であるはずの田無三五郎自身が参加していないことである。もちろん田無三五郎がこの「談判」を知らなかった背景には、「みんな世帯持ちの人達だ」から「おめえさん達の気持は有難えが」「会社から何か云つて来るまで待つていただくとするわ」といい、何もしないでいてくれることを「当人の俺としての頼み」として仲間に頼んでいたということもあるし、「あんまり病人の枕元でさわぎ立てて、気を昂ぶらせても考へもんだ」と言った仲間たちの気遣いということもあるだろう。だが、それでも「談判」は行われていた。そしてそのことについて三五郎のもとには「談判」に参加していた息子の田無二六からも何の連絡もされないのである。これは金と佐々木が訪ねてきて、「みんなで申合はして黙つてゐたんだが」「あれからずつと会社と談判して」いて、そして「田無の父つあん、おめえに相談しねえでわりいが、実あ仕事場の連中ア、これから秋口の注文の多い時なんだから、思ひ切つてストライキをやらかさう」と考えているという〈運動〉の内容が田無三五郎にとって「全く彼の予期しなかつたこと」であったと示されていることからわかる。このように田無三五郎は自らがその起点となったにも関わらず、〈運動〉する労働者たちからも疎外されている状態なのである。これはストライキによって労働者の権利を求める〈運動〉の主体である組織が会社との「談判」をしていく上で結果的に会社と同様、健全な身体の保持者を求めているという残酷な事実の証左となっている。つまり、田無三五郎という人物が主人公に据えられたことによって、健全な身体を破砕されたものは〈運動〉の起点とはなり得ても、その担い手にはなれないというプロレタリア文学の求める〈運動〉自体の問題が露呈させられているのである。

万一の時の保障を十全なものにするために実際に損害を受けた人間ではなく、これからその損害を受けるかもしれない人々によって〈運動〉が展開されていることに問題点の根幹がある。ここには既に指摘した防衛意識からの欲望が発見でき、〈運動〉とは、三五郎のようになりたくないという負の欲望を起点として整備された集団の欲望の発露であることがわかる。つまり〈運動〉の側から三五郎を意味づけようとしたとき、三五郎はあくまでその対象として存在するだけであるのだ。

六、遊離する三五郎

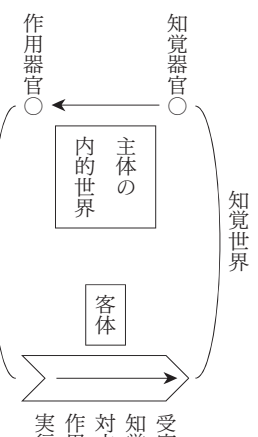
田無三五郎は身体的問題が原因で〈運動〉の担い手にはなれなかった。しかし三五郎の存在はそうした問題の告発だけにとどまらない。語り手の求めた実験は田無三五郎に焦点を当てていたために、「去脳動物」から全く反対に「頭」だけになった三五郎の姿も照らし出しているのである。テクストの四章で語られる「頭の中だけの旅行」をめぐる三五郎の考察は、これまで田無三五郎に労働をさせる刺激として機能していた「日に三

回の汽笛」がもたらす新しい反応である。この「旅行」として表されている三五郎の考察は、やはり「実験心理学」的に新たな展開を要請するのだ。

三五郎は事故後「手足を動かすと、傷口へひどく痛みが伝はつ」てしまうために身動きが取れずにいるが、「寝てゐて、頭の中で」移動し「広い磧を見渡すぶんには、どこにも痛みといふものはひびかなかつた」ために「頭の中だけの旅行」を繰り返すようになる。そしてその「旅行」を通して「十何年来無意識に眺めてゐた一本々々の草も、向ふ岸の杉の木も、いつも本流に取残される青みどろの水溜りも、ぢかに足で歩いてみるよりもはつきりと目に見え」てくるようになったと言う。

この行為は三五郎のかつての労働空間であった川の光景を「頭の中」で再現しようとする行為であり、それは三五郎の主観に基づく空間の虚構化を意味する。先に引用した「十一月の断想」の中で前田河が「一つの工場を描写するには、自でその工場の設計から企業、作業、監督、労働の全範疇に亘つてやつて見る位の真剣な想像力の再燃が必要であるべきは当然であ」り「しちくどさがあり、執拗があつてこそ、始めてその作物の現実性が存立する」と主張しているが、動けない身体を抱えた三五郎が「手足の活動から解放された頭脳」をもつてして川とそこにある仕事場を「手に取るやうに思ひ出」し「機械船を隈なく調べ廻はる」ことまでできてしまうのは、まさに前田河が求めた虚構の「作物の現実性」を三五郎が達成したためである。

また、主観に基づく虚構化が行われていることは、環世界という概念を導入することでより明白になる。環世界とはドイツの生物学者ヤコブ・フォン・ユクスキュルという人物が一九三四年に提唱した概念だが、「主体が知覚するものはすべてその知覚世界（Merkwelt）になり、作用するものはすべてその作用世界（Wirkwelt）にな」り、「知覚世界と作用世界が連れ立って環世界（Umwelt）という一つの完結した全体を作り上げている」（傍点ママ）というものである。[17] この環世界における主体と客体の関係を示したものが機能環として左図のようにまとめられる。



この図を一見すればわかるように、ユクスキュルの環世界は行動主義心理学の示したS－Rの関係と同様の構造を取りつつ、主体となるそれぞれの中に内的世界が構築され、それはその主体特有のものであるとする主観的な世界認識を認めたものである。このユクスキュルの環世界の概念を田無三五郎の認識に当てはめていくと、怪我をする以前は「日に三回の汽笛」が刺激として知覚器官（耳）に届くと「二本の手と、二本の足」を作

用器官として用いた「ごく単純な労働」という作用を導き、磧での労働という客体が整備され、何の疑問も抱かずにただ働くだけの「去脳動物」としての三五郎の環世界が構築されていた。しかし怪我によって「二本の手と足」を作用器官として用いることが出来なくなったために、これまで成立していた三五郎の環世界は消失し、新たな環世界の創出を余儀なくされる。そして「日に三回の汽笛」という同じ刺激から「川の光景を手に取るやうに思ひ出」し「三五郎の手足の活動から解放された頭脳」が手足に代わる新たな作用器官として磧での労働を捉え直していくのである。その結果成立した認識が

考へ考へて来ると、田無三五郎にとつては、あの鋼鉄のやうに、夜も昼ものんのんと海へ流れ落ちる川が、この上もなく憎いものに思はれて来た。川があればこそ、太田兵造会社なんてものもあるのだ。菱刈文吉は、川から生れた赤鬼でなくなんだらう？　砂利を、建物に、コンクリの柱に、鉄橋に、道路に使つたところが、それが田無三五郎と何の関係があるか？

という川への怨嗟である。労働の場である以上の意味づけを持たなかった川は全く異なる意味を持ったのだ。ここに示される川への憎しみは、川が在るという客観的事実を太田兵造会社に良いように使われている田無三五郎個人の主観へと落とし込んだ結果の主観的な川認識だと言えよう。そして川への怒りに満ちた三五郎の認識は、ついには次のような結論に達する。

―そして空想で歩けば歩くほど、彼には、この地獄のやうな仕事場に、川といふものを悪る賢い儲けのためにしてゐるものが、たつた一人あつたことにいらいらしはじめた。彼は、まだ、県会議員の太田兵造といふ男に会つたことがないのである。

ここで三五郎が「空想で歩けば歩くほど」太田兵造に「いらいら」するという結論が導き出されているが、最終的に川は三五郎ら労働者を迫害する太田兵造会社の頂点・太田兵造県会議員にまでつながる新たな意味づけがなされるのである。

このように拡張された三五郎にとっての主観的現実は、磧という労働現場を飛び出して、さらに砂利を使って「悪る賢い儲け」をしている会社という〈機械〉の全貌を見る段階にまで認識のレベルが引き上げられた。つまり三五郎は小説テクスト内において、〈運動〉から疎外されたために自分たち労働者を磧の労働現場との二項関係だけでなく、労働者と労働現場の裏側にある会社まで視野を広げ、その労働環境すべてを総体として〈見る〉ことが可能となったと考えられるのである。この視点は〈運動〉の当事者になれなかった三五郎特有のものとなった。「個人的な満足」を満たす段階でしかなかった〈運動〉に実際に携わっていた他の誰にも出来なかったスキャップの説得を「はじめてものを考へることを知つた彼だけが知つたこと」〈傍点論者〉として三五郎は行えたのは、このためである。

こうしたテクストの二重構造が明らかになったことによって、〈運動〉を展開した仲間たちが働けなくなった三五郎の姿から抱いた負の欲望をさらに三五郎自身がもう一度自らの欲望として引き受け直すという事態が起こっていることがわかる。それは他の誰とも共有されない欲望となり、かつて「アミーバ

の分裂」とまで言われた息子の二六にすら理解されることはない。しかしそれによって三五郎はただ〈運動〉に消費されるだけでなく、〈運動〉自体の問題を照射することにもなったのである。

結語、実験体としての田無三五郎

「階級のための芸術」を求めるプロレタリア文学運動の枠組みの中で評価する限り、この「川」は上手い作品とは言えないかもしれない。だが、科学的方法を用いて「実験心理学」的に、三五郎と会社の関係から個別性の問題を、〈運動〉との関係から身体性の問題を、身体との関係から認識の相対性の問題を示し続けたことによって、〈運動〉の中の権力性をいみじくも露わにしてしまった。そしてそれは、葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」（『文芸戦線』大15・1）などプロレタリア文学初期の作品から既に身体の毀損とそれに基づく「階級的意識」という「正しき意識の目ばえ」という表現が求め続けられながらも、それ以上の議論がなされずにいたことと無関係ではない。毀損された身体の所持者とそこから発生する〈運動〉との諸関係について考察を進めたときに、社会的弱者となった労働者を救うべき〈運動〉の「正しき意識」はさらなる弱者を消費して成り立ってしまっていることによる自家撞着に陥らざるを得なくなるからだ。しかしプロレタリア文学の形式を用いて書かれた田無三五郎というキャラクターの役割が期せずして複層化したことで創出された問題は、そのようなプロレタリア文学を相対化する自己批判的な性格を持つものとなった。

このねじれが起きているにも関わらず、安易に旗を振って死ぬという結末に回収されたために結局枠組みに囚われてしまったのだが、以上のような認識に立ったとき、「川」はプロレタリア文学の枠組みの中にありながらも、従来のプロレタリア文学とは全く違う相貌を見せてくれる小説になるのである。科学に対する信頼が大きく揺らいでいる現在において文学の有用性を考えるとき、科学的思考を取り入れようと動いた時代に書かれたこのような小説たちが、科学的合理性を示しながらも文学作品であるがゆえに抱えていた問題を明らかにして、もう一度問い直していくことが今必要とされているのであろう。

注

（1）ルネ・ジラール『欲望の現象学』新装版（古田幸男訳　法政大学出版局　平成二十二年十一月）

（2）横光利一「文学的実態について」（『定本横光利一全集』第十三巻（河出書房新社　昭和五十七年七月）から引用、初出は「もう一度文学について」（『読売新聞』昭和四年九月二十七日）である。）

（3）松井雷多「善郎と廣一郎」（『中外商業新報』昭和七年七月五日）

（4）杉山平助「心にとまった小説」（『時事新報』昭和七年七月一日）

（5）蔵原惟人「新芸術形式の探求へ　―プロレタリア芸術当面の問題について―」（初出は『改造』（昭和四年十二月）、引用は『新日本プロレタリア文学評論集』四巻（新日本出版社　平成二年七月）による）

（6）新居格「機械と文学の関渉」（『東京朝日新聞』昭和四年五月十二日～十四日）

（7）石浜知行「機械と芸術」（『プロレタリア芸術教程』第三輯　昭和五年四月）

（8）ドイツ本国での公開は昭和二（一九二七）年一月十日、日本での

田節子訳　岩波文庫　平成七年）

公開は昭和四年四月三日である。

（9）チェコでの発表は大正九（一九二〇）年、日本では金星堂から大正十三年に『ロボット』として鈴木善太郎によって翻訳されている。

（10）昭和三年に大礼記念京都博覧会において西村真琴が東洋初のロボットとして学天則を制作し発表している。また板垣鷹穂「機械のリアリズム」への道」（『東京朝日新聞』昭和四年九月十日朝刊）が掲載された同じ紙面に丸善のオノト万年筆の広告があり、それには「機械人（アレボックス）がオノトを使ふ　時代が軈て来ます。機械人が電気工学の脅威であるやうにオノトも亦万年筆界の脅威！　共に微妙な生命があるやうに自由自在に活動します」と銘打たれ、「機械人」のイラストが添えられている。

（11）この評論についての先行研究として、中田幸子『前田河廣一郎における「アメリカ」』（国書刊行会　平成十二年）が前田河のシンクレア受容の観点から取り上げている。シンクレアやジャック・ロンドンらに倣って「執拗があつてこそ、始めてその作物の現実性が存立する」と主張する前田河にとって当時のシンクレアが「思想、形式、内容などにおいて規範とするに足る作品の書き手であった」と中田は論じている。

（12）徳永直『太陽のない街』（『戦旗』（昭和四年六～十一月）に連載、単行本は戦旗社（昭和四年十二月）、引用は『現代長編小説全集』（三笠書房　昭和十二年一月）による。

（13）ジョン・ワトソン『行動主義の心理学』（安田一郎訳　河出書房新社　昭和五十五年）

（14）E・T・ヒラー『ストライキ』（シカゴ大学出版部　昭和三（一九二八）年）

（15）前田河廣一郎「ストライキの研究」（『文芸戦線』昭和五年二月）であるが、これは前田河が「編訳」し「或る部分は全然組立を変へた」ものであると前書きに記している。

（16）島村輝『臨界の近代日本文学』（世織書房　平成十一年）

（17）ユクスキュル・クリサート『生物から見た世界』（日高敏隆・羽